柴田町文化財調査報告書第８集

柴田町の遺跡

－平成 31 ～令和３年度 発掘調査報告書－

令 和 5 年 3 月

宮城県　柴田町教育委員会

柴田町文化財調査報告書第８集

柴田町の遺跡

－平成31～令和３年度　発掘調査報告書－

令和５年３月

宮城県　柴田町教育委員会

序　　文

豊かな自然に囲まれ、自然災害も少ない柴田町には、推定樹齢600年の国指定天然記念物・雨乞のイチョウや、鎌倉時代に刻まれた高さ2.4mの阿弥陀如来座像をはじめとした富沢磨崖仏群、明治時代より調査が行われ日本の学術史上でも著名な上川名貝塚、また「伊達騒動（寛文事件）」に関わったとされる原田甲斐宗輔の居城・船岡城（船岡館跡）など、多くの歴史遺産があります。こうした文化財は地域の人々によって大切に守り伝えられてきました。また、柴田町で登録される埋蔵文化財包蔵地（遺跡）も96箇所にのぼっており、弛みなく続いてきた人々の営みの痕跡が、今もそのまま土中に眠っています。これらの有形･無形の文化財は町民はもとより国民共有の財産であり、次世代への継承は、今を生きる私たちに与えられた重要な責務です。

しかしながら、私たちの生活様式の変化とともに、文化財を取り巻く環境もめまぐるしい変化を遂げています。生活の利便性が向上し、開発行為が増加する一方で、数百年、数千年の間守られてきた埋蔵文化財が、破壊や消滅の危機にさらされています。

このような中、当教育委員会では、開発機関と協議を重ね、多くの方々の理解と協力をいただきながら、文化財の後世への継承に努めているところです。

本書は、平成31年度から令和3年度にかけて、遺跡指定範囲（埋蔵文化財包蔵地）での開発計画に先立ち、柴田町が遺構の有無を確認するために実施した発掘調査（確認調査）の結果について報告するものです。

調査にあたりましては、地権者や地域の皆様、関係機関から多大なるご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

最後に、この成果が地域の歴史的解明の一助になりますことを願い序といたします。

令和5年3月

柴田町教育委員会教育長　船迫　邦則

目　　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　埋蔵文化財の発掘調査……1
1. 中居貝塚……2
2. 船岡館跡……4
3. 入間野平城館跡（第１次調査）……5
4. 寺後遺跡……7
5. 川原遺跡……7
6. 西館館跡……8
7. 船岡館跡……8
8. 川原遺跡……9
9. 入間野平城館跡（第３次調査）……9
10. 入間野平城館跡（第４次調査）……10
11. 八幡館跡……10
12. 船岡館跡……11
13. 西館館跡……13

第Ⅱ章　その他……15
資料紹介「内嶋コレクションに見る上川名貝塚収集土器について」
－上川名Ⅱ式土器理解のために－……15

例　　言

1．本書は、宮城県柴田町教育委員会が令和31年度から令和３年度に実施した埋蔵文化財調査（確認調査）の概要をまとめた報告書である。

2．調査は柴田町教育委員会が実施した。

3．発掘調査に際しては、宮城県教育委員会のご指導・ご助言を賜った。

4．本書で使用した測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。

5．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。

SB：掘立柱建物跡　SX：竪穴状遺構　SK：土坑

6．本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、第Ⅰ章を畠山未津留、第Ⅱ章を土岐山 武が執筆し、畠山未津留が編集した。

7．発掘調査の記録や出土遺物は、柴田町教育委員会が一括して保管している。

第Ⅰ章　埋蔵文化財の発掘調査

平成31年から令和3年に実施した確認調査は、平成31（令和元年）年度3件、令和2年度4件、令和3年度6件の合計13件である。このうち3箇所で遺構を検出し、1箇所が本発掘調査となった。内訳は以下の表の通りである。これらの確認調査の概要について記述する。

第1図　確認調査対象遺跡

令和元年度（2019）※遺跡名の頭の番号は本書の掲載番号

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	対応	調査期間	申請面積	調査面積	調査結果
1	8012	宝中屠貝塚	大字入間野字中屠109	確認調査	土地充填遺跡確認調査	令和元年8月1-5日	1,648㎡	300㎡	遺構検出
2	8098	船岡館跡	船岡字館山地内	工事立会	公園施設整備工事	令和元年8月8日	15.38㎡	800㎡	遺構なし
3	8098	宝船岡館跡	船岡西一丁目10番74	確認調査	個人住宅新築工事	令和元年9月12日	256㎡	30㎡	遺構なし
4	8098	船岡館跡	船岡西一丁目6-28	工事立会	電柱建替・支線新設工事	令和元年10月23-25日	15.38㎡	5.5㎡	遺構なし
5	8098	船岡館跡	船岡字館山地内	工事立会	解放	令和元年12月26日	15.38㎡	3㎡	遺構なし
6	8098	船岡館跡	船岡西一丁目10番74	工事立会	個人住宅新築に伴う給排水布設工事	令和2年1月25日	256㎡	30㎡	遺構なし
7	8091	宝入間野平城館跡	槻木下町一丁目136番1	確認調査	集合住宅新築工事（※令和2年に本発掘調査）	令和2年3月3-5日	960㎡	230㎡	遺構検出

令和2年度（2020）

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	対応	調査期間	申請面積	調査面積	調査結果
1	8038	宝寺後遺跡	西船迫三丁目1番30	確認調査	個人住宅新築工事	令和2年5月25日	261.16㎡	15㎡	遺構なし
2	8003	宝川原遺跡	船岡中央一丁目50-3	確認調査	個人住宅建替工事	令和2年7月10日	278.17㎡	34㎡	遺構なし
3	8098	船岡館跡	船岡字館山地内	工事立会	公園施設整備工事	令和2年9月14日	15.38㎡	257㎡	遺構なし
5	8054	宝西館館跡	大字中名生字四郎124-1	確認調査	個人住宅新築工事	令和3年6月16日	506.01㎡	6㎡	遺構なし
6	8098	宝船岡館跡	船岡西一丁目50番5	確認調査	個人住宅新築工事	令和2年10月5日	269.43㎡	36㎡	遺構なし
7	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	工事立会	公園施設整備工事	令和3年4月7日	15.38㎡	180㎡	遺構なし
8	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	猟銃工事	公園施設整備工事（柿の植栽）	令和2年9月14日	柿	－	遺構なし
9	8098	船岡館跡	船岡西一丁目7-12地内	工事立会	電柱設置工事	令和3年1月12日	2.5㎡	2.5㎡	遺構なし
10	8092	八幡館跡	槻木白鳥町丁目3-37	工事立会	個人住宅解体工事	令和2年12月7日	55㎡	84㎡	遺構なし
11	8003	川原遺跡	船岡中央一丁目9-36	工事立会	個人住宅解体工事	令和3年4月13日	234.90㎡	82㎡	遺構なし
12	8009	源信坊塚	槻木字源信111地内	工事立会	電柱新設工事	令和3年4月16日	1㎡	1㎡	遺物なし

令和3年度（2021）

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	対応	調査期間	申請面積	調査面積	調査結果
1	8023	八幡館跡	西船迫三丁目1番30	工事立会	電柱新設工事	令和2年5月25日	261.16㎡	1㎡	遺構なし
2	8003	宝川原遺跡	船岡中央一丁目50-3	確認調査	建売住宅新築工事	令和3年6月9日	229.49㎡	25㎡	遺構なし
3	8091	宝入間野平城館跡	槻木下町一丁目133、134番	確認調査	個人住宅消雪工事	令和3年6月10日	339.18㎡	20㎡	遺構なし
4	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	工事立会	公園施設整備工事（フェンス支持柱の打設）	令和3年7月9日	15.38㎡	－	遺構なし
5	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	工事立会	公園施設整備工事	令和3年8月17日	15.38㎡	147㎡	遺構なし
6	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	工事立会	公園施設整備工事	令和3年7月14日～9月17日	15.38㎡	83㎡	遺構なし
7	8091	宝入間野平城館跡	槻木下町一丁目135番2、5	確認調査	集合住宅新築工事	令和3年7月20日	676.5㎡	98㎡	遺構なし
8	8098	船岡館跡	船岡西一丁目10-51	工事立会	電柱設替工事	令和3年8月27日	1㎡	1㎡	遺構なし
9	8047	上野遺跡	大字船岡字上野4番地1	工事立会	公園施設整備工事	令和3年11月30日	46㎡	46㎡	遺構なし
10	8092	宝八幡館跡	槻木白鳥町丁目98番1、2、3	確認調査	建売住宅新築工事	令和3年8月9日	823.46㎡	60㎡	遺構なし
11	8098	宝船岡館跡	大字船岡字館山地内	確認調査	公園施設整備工事（二の矢想地伐採）	令和4年10月19日	15.38㎡	180㎡	遺構検出
12	8091	入間野平城館跡	槻木下町一丁目135-5地内	工事立会	電柱新設工事	令和3年10月26日	1㎡	1㎡	遺構なし
13	8009	源信坊塚	大字槻木字源信102-2、98-6	工事立会	個人住宅新築工事	令和4年1月12日	286.38㎡	40㎡	遺構なし
14	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	工事立会	公園照明設備工事（支柱設置）	令和3年12月21日	15.38㎡	1㎡	遺構なし
15	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	工事立会	公園補修補修工事（柿の交換）	令和3年12月21日	15.38㎡	－	遺構なし
16	8098	船岡館跡	大字船岡字館山地内	工事立会	電柱整備工事	令和3年11月17日	15.38㎡	130㎡	遺構なし
17	8060	宗沢遺跡	大字中名生字熊野堂内	工事立会	公園新設工事	令和4年2月2日	0.5㎡	0.5㎡	遺構なし
18	8091	入間野平城館跡	槻木下町一丁目135-5地内	工事立会	電柱新設工事	令和4年2月10日	1㎡	1㎡	遺構なし
19	8054	宝西館館跡	大字中名生字四郎地内	確認調査	水路新設工事	令和4年2月1日	222㎡	180㎡	遺構なし
20	8049	新中口遺跡	槻木字西一丁目11-12番地	工事立会	電柱新設・撤去工事	令和4年2月25日	1.96㎡	1.5㎡	遺構なし

①中居貝塚

遺 跡 名：町史跡 中居貝塚（遺跡番号：8012）
所 在 地：柴田町大字入間田字中居 109
調 査 日：令和元年 8 月 1 日～ 5 日
調査面積：300㎡
調査原因：太陽光発電設備設置

調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、平成 31 年 3 月 27 日付で提出された「太陽光発電設備設置計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年 4 月 5 日付：文第 66 号）に基づくものである。確認調査は、令和元年 8 月 1 日～ 5 日に実施した。申請地である丘陵南斜面に 8 本のトレンチ（T1 ～ 8）を設定し、遺構検出作業を行った。

(2) 調査成果（第 2 図）

①基本層序：Ⅰ層(表土)は褐色土で層厚 30 ～ 50cm である。Ⅱ層は地山で、風化した凝灰岩である。
②発見した遺構と遺物：T1 で土坑、T5 ～ T8 で掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑、ピットを検出した。
遺物は T1 の土坑上面より縄文土器が出土した。

【掘立柱建物跡】（第 2 図）

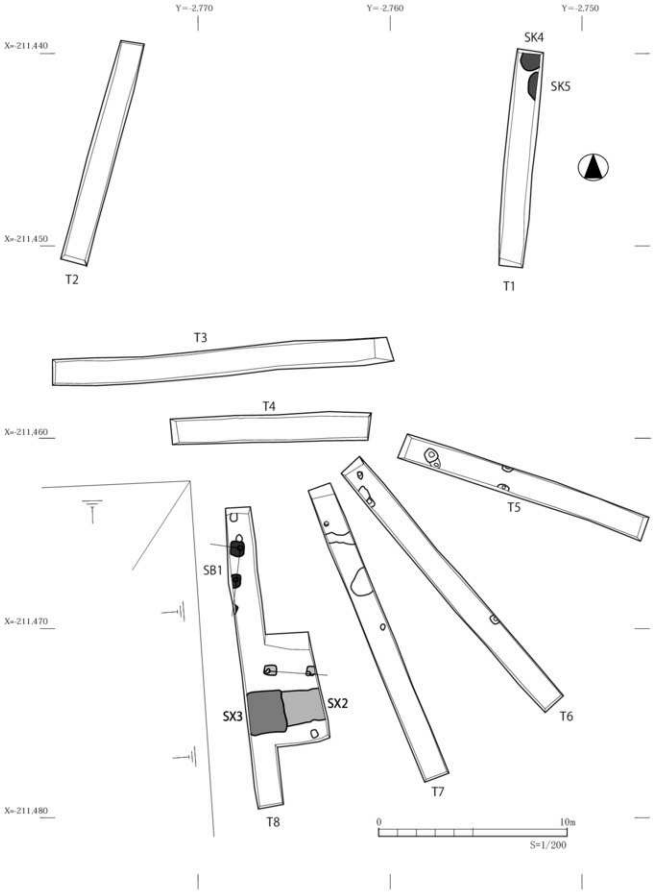
T8 で掘立柱建物跡 1 棟（SB1）を検出した。南北 2 間以上の建物である。建物の方向は、南北柱列で図ると北端で 3 度、東に偏している。建物の柱間は北から 1.6 m である。建物主体部はトレンチの西側とみられるが、切土により失われている。柱穴の掘り方は隅丸方形で直径 1 m、柱痕跡の直径は 35cm である。出土遺物はない。また、T8 の東西方向の柱列 2 基も掘立柱建物跡の可能性がある。掘り方は隅丸長方形で長軸 70cm、短軸 50cm で、柱の抜き穴が認められる。出土遺物はない。

【竪穴状遺構】（第 2 図）

T8 で確認した。重複する 2 基を確認した。SX3 が新しく、SX2 が古い。SX2 の規模は東西

SB1 掘立柱建物跡（南より）

SX2・3 竪穴状遺構（南東より）



第２図　中居貝塚遺構平面図

2.0m 以上、南北 1.8m、SX3 は東西 2.2m 以上、南北 2.2m で、隅丸方形状と推定される。出土遺物はない。

【土坑】（第２図）

T1 で２基（SK4、SK5）を確認した。主体部は調査区外にある。重複はない。穴の直径は少なくとも 1.3m 以上と推定される。検出の際に埋土上面より縄文土器の破片が出土した。

まとめ：今回の調査では、縄文時代の貝層の分布は確認できなかったものの、新たに奈良・平安時代とみられる掘立柱建物跡や竪穴状遺構が見つかった。掘立柱建物跡は比較的大きな建物で、こうした規模の遺構は近隣遺跡でも確認されていない。周辺地域の奈良・平安時代の土地利用のありかたを考える上で、今後の重要な検討課題である。T1 の土坑については、壁がほぼ垂直に立ちあがることや、上面からは縄文時代中期頃とみられる土器の破片が出土したことから、縄文時代の貯蔵穴の可能性も考えられる。

②船岡館跡

遺　跡　名：町史跡　船岡館跡（遺跡番号：8098）
所　在　地：柴田町船岡西二丁目 10 番 74
調　査　日：令和元年９月 12 日
調査面積：32㎡
調査原因：個人住宅新築工事

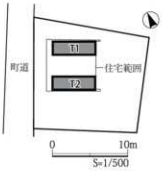
調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和元年８月 27 日付で提出された「個人住宅新築工事計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年９月４日付：文第 1475 号）に基づくものである。確認調査は、令和元年９月 12 日に実施した。建物基礎の該当箇所に２本のトレンチを設定し、遺構検出作業を行った。

(2) 調査成果

表土から深さ２ｍまで岩石を多量に含む盛土である。地山層や遺構の検出はなかった。周辺一帯は昭和 14 年（1939）に海軍が船岡に設置した旧第一海軍火薬廠の関係者の宿舎用地として造成された地区である。一帯の丘陵を造成した際の排土を用い、谷を埋めたてたとみられる。



調査区配置図

③入間野平城館跡（第１次調査）

遺 跡 名：入間野平城館跡（遺跡番号：8091）

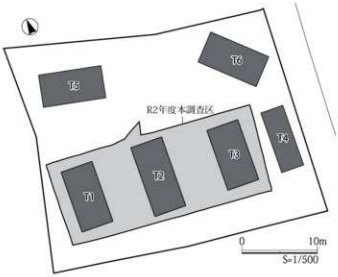
所 在 地：柴田町槻木下町一丁目 136 番 1

調 査 日：令和２年３月３日～６日

調査面積：60㎡

調査原因：集合住宅新築工事

調査地位置図



調査区配置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和２年１月７日付で提出された「集合住宅新築工事計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年１月 15 日付：文第 2602 号）に基づくものである。確認調査は、令和２年３月３日～６日に実施した。申請地内に６本のトレンチを設定し、遺構検出作業を行った。

※確認調査の成果を受けて、本申請地は令和３年度に記録保存を目的とした本発掘調査を実施した（柴田町教育委員会　2021）。

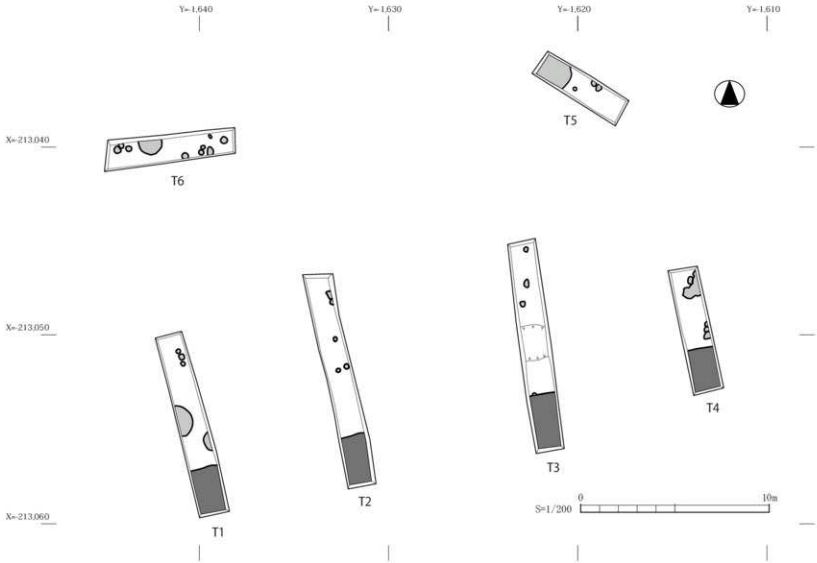
(2) 調査成果（第３図）

①**基本層序**：Ⅰ層は層厚 15 ～ 20㎝の表土、Ⅱ層は層厚 20 ～ 30㎝のオリーブ褐色シルトの旧表土、Ⅲ層は層厚 40 ～ 50㎝の炭化物を多く含む暗オリーブ褐色シルト、Ⅳ層は層厚５～ 10㎝の黒褐色ブロックを含む黄褐色粘土質シルトで遺構検出層である。

②**発見した遺構と遺物**：溝跡、土坑、ピットを検出した。T5 の西側土坑の上面から中世陶器の体部１点が出土した。

まとめ：T5 から在地産とみられる中世陶器が出土したことから、遺構の年代は少なくとも 13 世紀後半以降と推定される。また、T1 ～４では、東西方向に長さ 20m 以上、幅 2m 以上の溝跡を検出しており、その規模から城内の区画溝である可能性が高い（第３図）。

※本申請地ではこの確認調査の成果を受けて、令和３年度に本発掘調査を実施し、鎌倉時代後期から室町時代の遺構を確認した（柴田町教育委員会　2021）。



第 3 図　入間野平城館跡遺構平面図

④寺後遺跡

遺 跡 名：寺後遺跡（遺跡番号：8038）
所 在 地：柴田町西船迫三丁目１番 30
調 査 日：令和２年５月 25 日
調査面積：15㎡
調査原因：専用住宅新築工事

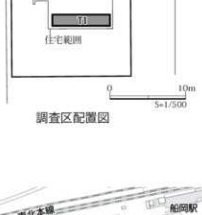
調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和2 年4 月2 日付で提出された「専用住宅新築計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知(同年５月1 日付:文第 326 号)に基づくものである。確認調査は同年５月25 日に実施した。住宅基礎の南辺にＴ１、北辺にＴ２・３の計３本のトレンチを設定し、調査を行った。

(2) 調査成果

深さ２ｍまで掘り下げたが、凝灰岩を多く含んだ盛土が続いており、地山は検出できなかった。遺構・遺物は確認できなかった。



調査区配置図

⑤川原遺跡

遺 跡 名：川原遺跡（遺跡番号：8003）
所 在 地：柴田町船岡中央一丁目 50-10
調 査 日：令和２年７月 10 日
調査面積：34㎡
調査原因：専用住宅新築工事

調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経緯

この調査は、令和２年５月 28 日付で提出された「専用住宅新築工事計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年７月 10 日付：文第 980 号）に基づくものである。確認調査は同年７月 10 日に実施した。住宅新築予定地に５本のトレンチを設定し、遺構検出作業を行った。

(2) 調査成果

深さ 1.5 ｍまで凝灰岩を多量に含んだ盛土で、地山は検出できなかった。遺構・遺物の検出はなかった。

調査区配置図

⑥西館館跡

遺 跡 名：西館館跡（遺跡番号：8054）
所 在 地：柴田町中名生字宮前 124-1
調 査 日：令和3年6月16日
調査面積：6㎡
調査原因：専用住宅新築

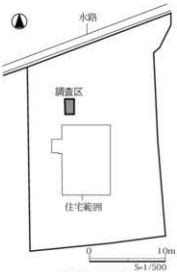
調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和2年6月18日付で提出された「専用住宅新築計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年7月15日付：文第1041号）に基づくものである。調査は令和3年6月16日に実施した。3×2mのトレンチ1箇所を設定した。

(2) 調査成果

①基本層序：Ⅰ層は70～80cmの盛土、Ⅱ層は層厚10～20cmの旧水田層、Ⅲ層は層厚30cmの褐色粘土質シルト層、Ⅳ層は層厚20cmの灰色粘土、Ⅴ層は層厚10cmの明灰色粘土である。
②発見した遺構と遺物：旧水田層より下層は水性堆積層（粘土）の互層となっており、遺構・遺物の検出はなかった。



調査区配置図

⑦船岡館跡

遺 跡 名：町史跡　船岡館跡（遺跡番号：8098）
所 在 地：柴田町船岡西一丁目502番5
調 査 日：令和2年10月5日
調査面積：36㎡
調査原因：専用住宅新築工事

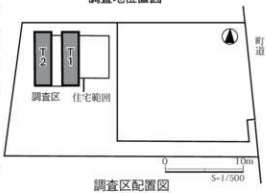
調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和2年8月8日付で提出された「専用住宅新築工事計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年9月18日付：文第1674号）に基づくものである。確認調査は同年10月5日に実施した。建物基礎部分に2本（1.5×5m）のトレンチを設定した。

(2) 調査成果

厚さ20～30cmの表土を取り除くと、明黄色シルトの地山を検出したが、遺構・遺物の検出はなかった。



調査区配置図

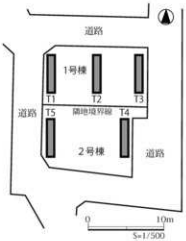
⑧川原遺跡

遺 跡 名：川原遺跡（遺跡番号：8003）
所 在 地：柴田町船岡中央一丁目 50-3
調 査 日：令和３年６月９日
調査面積：25㎡
調査原因：建売住宅新築

調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和３年４月 27 日付で提出された「建売住宅新築計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年５月 12 日付：文第 305 号）に基づくものである。確認調査は同年６月９日に実施した。住宅新築予定地１号棟にＴ１～３の計３本、２号棟にT4・５の２本、計５本のトレンチを設定した。



調査区配置図

(2) 調査成果

周辺は昭和 30 年代まで沼地であった場所である。深さ１m以上にわたり凝灰岩を多量に含む盛土のため、地山は検出できなかった。遺構・遺物の検出はなかった。

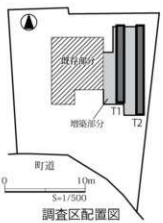
⑨入間野平城館跡（第３次調査）

遺 跡 名：入間野平城館跡（遺跡番号：8091）
所 在 地：柴田町槻木下町一丁目 133，134 番
調 査 日：令和３年６月 10 日
調査面積：20㎡
調査原因：専用住宅増築工事

調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和３年５月 13 日付で提出された「専用住宅増築工事計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年５月 21 日付：文第 497 号）に基づくものである。調査は同年６月 10 日に実施した。増築予定地に２本のトレンチを設定し、遺構検出作業を行った。



調査区配置図

(2) 調査成果

現地表面から 70㎝の深さで明黄色シルトの地山を確認したが、人為的な攪乱が広範囲に及んでおり、遺跡や遺物は確認できなかった。

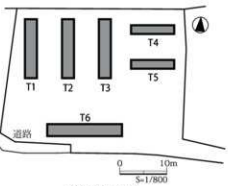
⑩入間野平城館跡（第４次調査）

遺 跡 名：入間野平城館跡（遺跡番号：8091）
所 在 地：柴田町槻木下町一丁目 135 番２、135 番５
調 査 日：令和３年７月 20 日
調査面積：計 97.8㎡
調査原因：集合住宅新築及び専用住宅新築工事

調査区位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和３年６月３日付で提出された「集合住宅新築工事計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年６月９日付：文第 747 号）に基づくものである。確認調査は同年７月 20 日に実施した。申請地内に６本のトレンチを設定し、遺構検出作業を行った。



調査区配置図

(2) 調査成果

①基本層序：いずれの調査区でもⅠ層は層厚 20cm の表土、Ⅱ層は旧表土で層厚 20 ～ 30cm の褐色土、Ⅲ層は層厚 40 ～ 50cm の褐色シルト、Ⅳ層は層厚 10 ～ 30cm の黄褐色粘土質シルトである。

②発見した遺構と遺物：広範囲にわたって地山Ⅳ層が攪乱されており、遺構は確認できなかった。Ⅰ・Ⅱ層からは、近世とみられる建物礎石や陶磁器類（幕末以降）が出土した。

⑪八幡館跡

遺 跡 名：八幡館跡（遺跡番号：8092）
所 在 地：柴田町槻木白幡４丁目 98 番１、２、３
調 査 日：令和３年８月９日
調査面積：60㎡
調査原因：建売住宅新築工事

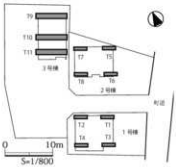
調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和３年７月 15 日付で提出された「建売住宅新築工事計画に伴う発掘届」に対する宮城県通知（同年７月 21 日付：文第 1135 号）に基づくものである。確認調査は同年８月９日に実施した。３棟の建物基礎部分にトレンチを設定し遺構検出作業を行った。

(2) 調査結果

1号棟、2号棟は、深さ90cmまで盛土である。検出した褐色シルトの地山は削平されており、遺構は確認できなかった。3号棟周辺では深さ40cmで褐色シルトの地山を検出したが、遺構や遺物は確認できなかった。



調査区配置図

⑫船岡館跡

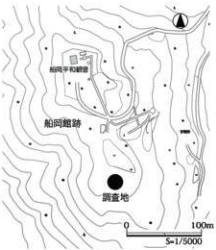
遺 跡 名：町史跡　船岡館跡（遺跡番号：8098）

所 在 地：柴田町船岡字舘山地内

調 査 日：令和3年10月19日

調査面積：180㎡

調査原因：令和3年度歩くまち柴田推進環境整備工事（船岡城址公園施設整備）



調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和3年10月4日付けで提出された「令和3年度歩くまち柴田環境整備工事計画（船岡城址公園施設整備）」に伴う発掘届への宮城県通知（同年10月13日付：文第1933号）に基づいて、同年10月19日に実施した。計画地内に13本のトレンチを設定し、遺構検出作業を行った。

(2) 調査成果（第4図）

①基本層序と遺構検出状況

【T1～4】Ⅰ層は暗褐色土（層厚10cm）の表土、Ⅱ層は暗褐色土（層厚10～20cm）、Ⅲ層は褐色土（層厚15cm）である。深さ40～50cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出し、上面で土坑とピットを検出した。出土遺物はない。

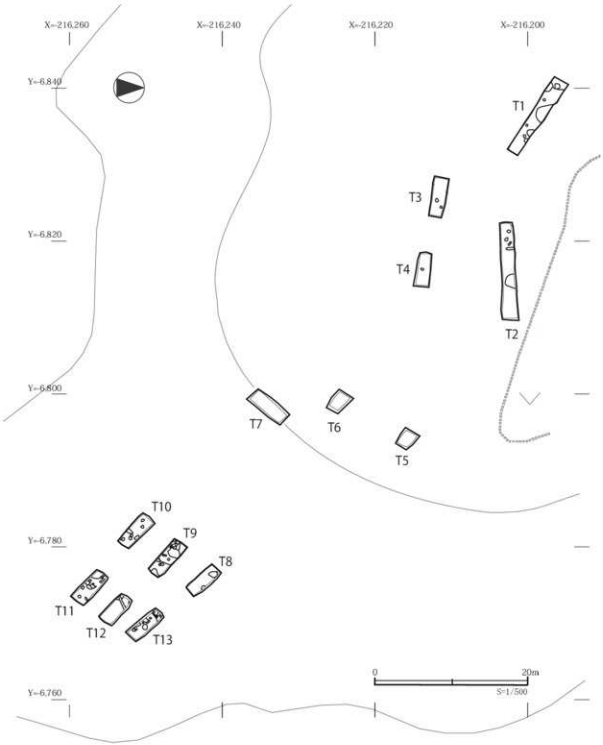
【T5】深さ80cmまで掘り下げたが地山Ⅳ層は検出しなかった。崩落土が厚く堆積している。

【T6】深さ60cmまで掘り下げたが地山Ⅳ層は検出しなかった。崩落土が厚く堆積している。

【T7】深さ50cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出したが、遺構は確認できなかった。Ⅳ層上には崩落土が堆積している。

【T8】Ⅰ層は暗褐色土（層厚15cm）、Ⅱ層は暗褐色土（層厚10～20cm）、Ⅲ層は黒褐色土（層厚10cm）である。深さ45cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出し、上面で土坑とピットを検出した。出土遺物はない

【T9】Ⅰ層は暗褐色土（層厚16cm）、Ⅱ層は暗褐色土（層厚12cm）、Ⅲ層は黒褐色土（層厚18cm）である。深さ50cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出し、上面で土坑とピットを検出した。出土遺物はない。



第４図　船岡館跡遺構平面図

【T10】Ⅰ層は暗褐色土（層厚 18cm）、Ⅱ層は暗褐色土（層厚 16cm）、Ⅲ層は黒褐色土（層厚 6cm）である。深さ 40cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出し、上面で土坑およびピットを検出した。出土遺物はない。

【T11】Ⅰ層は暗褐色土（層厚 18cm）、Ⅱ層は暗褐色土（層厚 16cm）、Ⅲ層は黒褐色土（層厚 15cm）である。深さ 50cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出し、上面で土坑とピットを検出した。出土遺物はない。

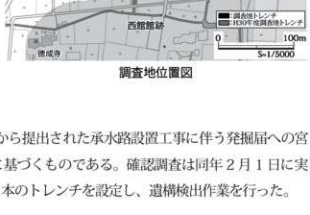
【T12】Ⅰ層は暗褐色土（層厚 16cm）、Ⅱ層は暗褐色土（層厚 12cm）、Ⅲ層は黒褐色土（層厚 10cm）である。深さ 40cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出し、上面で小溝跡、土坑、ピットを検出した。出土遺物はない。

【T13】Ⅰ層は暗褐色土（層厚 18cm）、Ⅱ層は暗褐色土（層厚 14cm）、Ⅲ層は黒褐色土（層厚 6cm）である。深さ 40cmでにぶい黄橙色凝灰岩の地山Ⅳ層を検出し、上面で土坑とピットを検出した。出土遺物はない。

まとめ:調査地は船岡館跡の二の丸東側にせり出した丘陵部で、二の丸東端で最上段の平場（T1 ～ 4）、斜面中段の平場（T5 ～ 7）、斜面最下段の平場（T8 ～ 13）からなっている。今回の調査では最下段の平場で小溝跡や土坑、ピットなどの遺構を確認した。重複するピットも多く、この平場が継続的に使用されていたことがうかがえる。遺構に伴う出土資料がないため遺構年代は不明であるが、本丸から二の丸にかけて中世陶器や瓦質土器等の遺物が表採されていることから、この二の丸東側の平場も何らかの施設があった可能性がある。

⑬西館館跡

遺 跡 名：西館館跡（遺跡番号：8054）
所 在 地：柴田町大字中名生字宮前地内
調 査 日：令和4年2月1日
調査面積：180㎡
調査原因：承水路設置工事（農業競争力強化農地整備事業　中名生・下名生地区）



調査地位置図

(1) 調査に至る経緯と経過

この調査は、令和4年1月7日付けで事業者から提出された承水路設置工事に伴う発掘届への宮城県通知（同年1月28日付：文第5704号）に基づくものである。確認調査は同年2月1日に実施した。熊野神社敷地西側の承水路計画経路に9本のトレンチを設定し、遺構検出作業を行った。

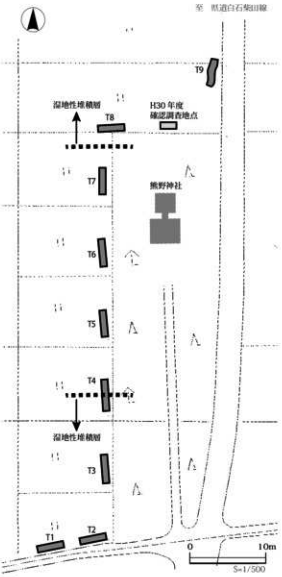
(2) 調査成果

①**基本層序**：T1・2・3・4 および T8・9（調査区配置図参照）では、深さ約1mまで暗オリーブ灰色・オリーブ灰色・暗緑灰色の粘土質シルトの互層が続いており、地山は検出できなかった。T5・6・7

では粘土質シルトの互層の下、深さ１ｍで褐色シルトの地山を確認した。

②発見した遺構と遺物：T4 から T7（熊野神社拝殿西側）にかけて地山Ⅳ層の高まりが認められるものの、遺構や遺物の検出はなかった。

令和元年度のほ場整備事業に伴う西館館跡の調査によると、西館館跡の北側の水田地帯では、層厚約１ｍにおよぶ洪水堆積層が認められ、今回の調査地の西 100 ｍの地点では、その洪水堆積層の下層で近世の水田耕作層や流路跡を確認している。こうしたことから、周辺一帯は近世に至るまでの生産区域と推定される（柴田町教育委員会　2021）。



調査区配置図

引用・参考文献

柴田町教育委員会　1974『柴田町の文化財　第５集－遺跡と遺物－』
柴田町教育委員会　1978『柴田町の文化財　第 10 集－城と館－』
柴田町史編纂委員会　1983『柴田町史　資料編Ⅰ・Ⅱ』
柴田町史編纂委員会　1989『柴田町史　通史編Ⅰ・Ⅱ』
柴田町教育委員会　2021『清水遺跡 宮前遺跡 西館館跡』柴田町文化財調査報告書　第４集
柴田町教育委員会　2021『入間野平城館跡』柴田町文化財調査報告書　第６集

第Ⅱ章　その他

資料紹介　内嶋コレクションに見る上川名貝塚収集土器について

上川名Ⅱ式土器理解のために

土岐山　武

Ⅰ　はじめに

「内嶋コレクション」とは柴田郡柴田町槻木に所在する東禅寺の住職であった内嶋大哲氏が長年に渡り収集した資料の総称である。氏が収集された資料は歴史関係資料の範疇に留まらず、岩石、化石、民芸品、自然遺物等幅広い分野に及び、その収集品の総量は平箱 11 箱の分量となっている。「内嶋コレクション」は後日、氏により「しばた の郷土館」に寄贈され、現在本館に保存されている。そのコレクション中に槻木貝塚群の一つである「上川名貝塚」収集土器がまとまって存在している。本稿ではその収集土器の概要を紹介する。

さて、柴田郡柴田町上川名に所在する本貝塚は古くから全国的に広く知られた貝塚であり、明治、大正、昭和にかけて坪井正五郎をはじめとする多くの著名な学者が現地を訪れている。1947 年（昭和 22）には加藤孝氏による発掘調査も行われている。このように「上川名貝塚」は多くの研究者により注視された貝塚であることを踏まえ、最初に「上川名貝塚」についての研究成果や概要について記述し、「内嶋コレクション」の紹介を行いたい。

Ⅱ　上川名貝塚調査研究のあゆみ

調査年・主体者	1896 年（明治 29）9 月　若林勝邦により踏査が行われる
内　容	記録として上川名貝塚が紹介されている
参考文献	若林勝邦「陸前磐城両地方二三の遺跡」『東京人類学会雑誌』第 102 号と『日本石器時代地名表』
調査年・主体者	1904 年（明治 37）10 月　佐藤伝蔵により踏査が行われる
参考文献	佐藤伝蔵「蔵王火山付近の石器時代の遺跡」『東京人類学会雑誌』第 20 巻第 223 号
	1905 年（明治 38）頃　貝殻が肥料として採取されたことが「柴田郡史」に記載されている
調査年・主体者	1908 年（明治 41）4 月 3 日　坪井正五郎が高橋健自らと踏査を行う
調査場所	柴田郡槻木村字上河原鹿島神社近傍
見聞録の記載内容原文	「広く開いた水田に面する丘。貝はギッシリ詰まり、場所によっては層の厚さが 2 間あった。以前は 2 反歩もあったが開拓のため今は残り少なくなっていた。発掘を試みるも、ザアザアと崩れ落ちるアサリ貝の間から、アワビ貝、獣骨、少量の土器片、石槍 1 個、凹石 1 個を検出するのみ。鹿島神社の裏手にも貝があると聞いてその所も試掘したが同様に獲物は乏しかった。」
成　果	遺物の採集という面では成果を見ることはできなかった
備　考	採集した貝類、土器片、部分人骨等は東京大学理学部人類学科に保管されている
内容記載文献	坪井正五郎　1908 「陸前名取郡地方における貝塚」『東京人類学会雑誌』第 2 巻第 267 号 6 月 20 日
年　代	1925 年 (大正 14)　柴田郡誌にもその存在が取り上げられる
記載内容原文	「槻木町字上川名、鹿島神社の鳥居前に有名な貝塚がある。この露出している面積は八反歩、深さ十尺余あり明治 38、39 年頃開墾して肥料に焼いた事があるが、明治 39 年故帝国大学教授理学博士坪井正五郎、現帝室博物館歴史課長文学博士高橋健自が岐阜県立中学教諭時代にこの上川名貝塚の実査研究を試みられたことがあり、当時石器、及び獣骨等の発見があり、坪井博士はこれ食屑人コロボックルの常食生活せる貝塚遺跡であると、講演されたことがある。」
内容記載文献	柴田郡教育委員会　1925 「一有史以前原史時代の柴田郡」『柴田郡誌』 P.14
報告者	1946 年（昭和 21）安田善二（槻木町入間野小学校長）により貝塚の現状が明らかにされた
現状報告内容	安田善二が貝塚破壊が甚だしいと小野 力（宮城県工業高等学校教諭）に報告した。小野 力は現地で遺物を採集し加藤 孝（東北学院大学教授）に報告した
調査年・主体者	1947 年（昭和 22）加藤 孝（東北学院大学教授）が小野 力等と発掘調査を実施する
調査内容	現地で出土遺物の採集を行う
成　果	出土遺物が縄文時代前期のものであるということが分かった。小野 力によって縄文土器編年的研究上極めて重要な資料と認識された
内容記載文献	柴田町町史編さん委員会　1983 「柴田町史通史編Ⅰ」
	1949 年（昭和 24）加藤 孝により継続的な調査が実施される
論文発表者	1951 年（昭和 26）加藤 孝による研究成果が発表される
成　果	二形式に分類できた。下層土器（槻木第二式並びに素山貝塚上層土器と併行）：破片総数 454 点　上層土器：破片総数 2292 点
内容記載文献	加藤 孝　1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』

論文発表者	1978 年 (昭和 53)　齋藤良治
成　果	槻木貝塚群が形成された縄文時代早期～前期初頭にかけては、海進の現象が全国に見られ、気候も温暖であったことを報告した
内容記載文献	齋藤良治　1978「槻木貝塚群とその自然環境」『柴田町郷土研究会報第 11 号』
論文発表者	1998 年 (平成 10)　青木 敬　桐生直彦
記載内容原文	「人面・土偶装飾付土器は 1994 年 7 月末現在 293 遺跡 443 例が認められるが、前期の事例は宮城県柴田町上川名貝塚の 1 例 (前期初頭) に留まっている。」
成　果	
内容記載文献	青木 敬　桐生直彦　1998 「縄文時代前期の人面装飾付土器」『東京考古 16』
調査年・主体者	2004 年 (平成 16)　宮城県教育庁文化財保護課
調査内容	確認調査　丘陵を調査対象とする　貝層及び遺構の有無の確認
成　果	水田の耕作面での貝殻の散布を確認した。用水路や水田側溝の断面で貝層の露出を観察する。西側貝層は予想より広がることが確認された。上川名Ⅱ式、大木 9 式土器を検出した
内容記載文献	宮城県教育庁文化財保護課　2004 「川上名貝塚調査報告書」
2005 年時点で渡辺 誠により人面装飾付土器の出土例が 750 例紹介されている。	

Ⅲ　上川名貝塚の概要

1　遺跡の立地

《地　形》　柴田町の中央付近を東西方向に白石川が流れている。その北側には奥羽山系に連なる高館丘陵が派生している。この丘陵の先端部は前面に広がる阿武隈川の後背低湿地帯に樹枝状に張り出している。

上川名貝塚をはじめとする金谷、中居、深町、館前、松崎貝塚からなる「槻木貝塚群」は丘陵先端部に位置している。

《標　高》　加藤 孝は現地調査時に上川名貝塚の測量を実施し、貝塚は標高 10 ～ 15 m の地点を占めていることを報告している。

《所在地》　宮城県柴田郡柴田町上川名字神廻り戸

《面　積》　鹿島神社南方に突出した舌状台地の東斜面または西斜面に発達した約 7,000㎡。

《土地の現状・所有者》　加藤 孝による発掘調査当時は畑地で、大沼千三氏の所有地であった。

《槻木貝塚群とは》

柴田町には多くの遺跡が存在している。柴田町史には縄文時代から中世までの遺跡が 96 ヶ所掲載されている。縄文時代の遺跡だけを見てみると 40 ヶ所確認されている（柴田町教育委員会　1989 『柴田町史通史編Ⅰ』）。その大部分が町北西部に展開する丘陵部や丘陵から延びた台地の先端部に位置している。丘陵部には標高 290 m の愛宕山や標高 245 m の猪倉山などが存在するが、その周辺の比較的標高の高い場所にも遺跡が存在している。 このように町内には高密度で縄文時代の遺跡が分布しており、「縄文時代の遺跡の宝庫といっても過言ではない」（同上　原文のまま掲載）と言わしめるほど多数の縄文遺跡が存在しているのである。

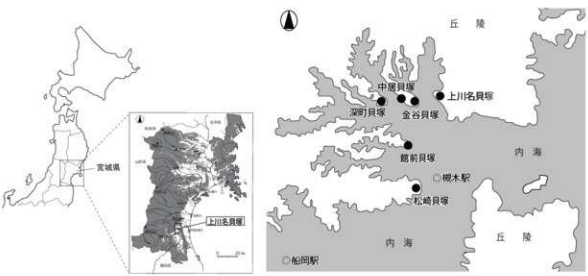
時期も縄文早期末から晩期までの全時期にわたっている。中でも、特賞すべきは槻木町西部の樹枝状に延びた台地上の先端部に松崎、上川名、金谷、中居、深町、館前貝塚が存在していることである。これらが槻木貝塚群と呼ばれている遺跡である。槻木貝塚群の時期について示してみると次の様になる。

番号	貝塚名 (標高 m は約)	早　期	前　期	中　期	後　期	晩　期
1	松崎貝塚　(13 m)	槻木Ⅰ, Ⅱ				
2	上川名貝塚 (10 ～ 15 m)	槻木Ⅱ	上川名　大木 1,4	大木 7,8,10	南境	大洞 BC　C1
3	金谷貝塚 (10 ～ 15 m)	槻木Ⅱ	上川名　大木 4	大木 7,8		大洞 C1　C2
4	中居貝塚 (8 ～ 15 m)	槻木Ⅱ	上川名 大木 1,2,3,4,5	大木 8	南境	
5	深町貝塚 (6 ～ 20 m)		大木 1,4,6	大木 7a-b, 8a-b, 9,10	南境	
6	館前貝塚 (7 ～ 10 m)		上川名大木 1,2,3,4,5,6	大木 7, 8b, 9,10	南境	大洞 C1　C2

(柴田町町史編さん委員会　1983 「槻木貝塚群出土遺物一覧表」『柴田町史通史編Ⅰ』と東北歴史資料館 1989『宮城県の貝塚』を参考に作成)

槻木貝塚群の標高に着目してみると時期による標高の違いが見られる。それだけで論ずることはできないが、これらは時期により海面の高さに変化が見られたことを示すと推定される。柴田町史にも「縄文時代早期の終わり頃は、海進により、槻木の沖積平野は一帯が海面と化していた」と記述されており、最も海進が進んだ縄文時代早期末頃は海水が丘陵のひだ深く入り込み、貝塚全面には内湾化した海が広がっていたと考えられる。その後、河川等による沖積作用と海水面の低下などにより、入江は遠浅となり海岸線が後退し湖沼化、湿地化そして陸地化が長い年月をかけて進んだものと思われる。

2 上川名貝塚の位置



槻木貝塚群が形成されたころの海岸線
（齋藤良治「槻木貝塚群とその自然環境」より引用）

3 上川名貝塚の自然環境について

上川名貝塚からハイガイが出土している。「ハイガイは内海の泥底に生息し、その生息域は本州南部以南、すなわち、紀伊半島以南とされている。本州北部に現在は生息していない。このことより、本貝塚が形成された縄文時代早期末から前期初頭は、現在よりも温暖であったことが伺える（齋藤良治　1978「槻木貝塚群とその自然環境」『柴田町郷土研究会報第 11 号』）。」とある。氏は当時の海岸線を想定しているが（上図参照）、上川名貝塚は内海を望む丘陵部に位置していたものと推定され、縄文時代早期から前期初頭にかけて海水が陸地に深く進入していた海進期があったことが分かる。また、シジミなどが豊富に生息していたことから、半鹹（かん）水の泥底でもあった。

上川名貝塚は前期初頭を最後にして放棄されている。これについて加藤 孝は「海岸線の後退に伴ってこの付近の地理的条件が変わり魚介が獲れなくなったため、住民がこの地を見捨て魚介に富む新しい海岸地方に移住したためであろう（加藤 孝　1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』）。」と述べている。齋藤良治も「縄文時代前期中葉頃から気候が寒冷化の傾向をたどり、海退期にはいり、白石川と阿武隈川が合流して流れ、自然堤防を形成し、これによって出口をふさがれ一大湖沼になり、丘陵間を流れる河川の流入により湖沼が埋没し低湿地帯と変化していったとされている（齋藤良治　1978　同上）。」と述べており、海岸線が大きく変化していったことが伺える。

※　ハイガイ：波の静かな内湾の泥の干潟に住む。先史時代には東京湾に多産した。三河湾以西の泥深い浅海に多い

「世界大百科事典　平凡社　広辞苑」

Ⅳ 上川名貝塚の出土遺物

1 自然遺物

加藤 孝は論文(加藤 孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』)で自然遺物、人工遺物について次の様に記述している。

(1)貝類 貝塚を構成している貝類は表土下 1.6 ～2 mの中に含まれており、アカニシ、ウミニナ、カキ、ハイガイ、ハマグリ、バイ、マテガイ、オキシジミなどである。

(2)獣骨 獣骨は破片共に 200 片を得た。イヌ、イノシシ、シカ、タヌキ、その他小動物骨片が含まれる。魚骨も 20 数片検出されている(以下省略)

2 人工遺物

(1)石 器

《 a 打製石器類》 石槍、箆状打製石器、有柄縦型石匙、無柄二等辺三角型石鏃等がある。

《 b 粗製石器類》 所謂礫器製品が多く、他に凹石等が出土している。

《 c 磨製石器類》 特に多いのは部分磨製石器並びに四面を磨いた石器類。破片であるが花崗岩製の環状石斧を蜆貝層下から得た。

(2)装身具

《 a 石製品 》 蜆貝層より石製品の首飾り(?)耳環(?)各 1 点を得た。石製ではあるが、あたかも古墳時代出土の金冠状を呈している。

《 b 貝 輪 》 3 点の貝輪を蜆貝層中より得た。内 2 点はアルカ属の貝を磨いて作成せられ、他は真珠質の貝から出来ている。

《 c 骨格器 》 8 点得た。内 4 点は鹿角を縦割して作った針である。(以下省略)

(3)土 器

出土した土器は調査整理の結果から見て、2 形式に分類することができたとされている。

淡水産蜆貝層から出土した「上層土器」と鹹水産蛤貝層またはその下位の黒土層中から出土した「下層土器」とである。

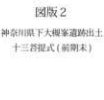
(4)人面装飾付土器

上層土器中に「人面装飾付土器」が見られた。

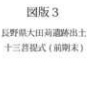
加藤 孝は特徴について「眉上弓が極度につり上がり眉上弓及び鼻部共に隆帯で表現せられ、半截竹管で隆帯上を刺突し、竹管で目を円形に表現し、眉上弓、鼻部、眼部に酸化鉄化粧をしている」と記述している。鼻の形は棒状で鼻筋がすっと通って伸びている。口の存在については不明。目に丹塗(にぬ)り朱の痕跡がみられる。地文は竹管文(押し引き文?)である。

図版 1
宮城県柴田町川上名貝塚出土
上川名Ⅱ式(前期初頭)

人面が付けられている位置が口縁部直下、外面であることより渡辺 誠の分類の「Ⅱ類 A 類」に分類されるものと思われる。「人面装飾付土器」については渡辺 誠のすぐれた研究があり、2005 年時点で 750 例紹介されている。その中でも前期の人面付装飾土器は私が知るかぎりでは本遺跡出土資料を含めて 5 例だけである。



図版 2
神奈川県下大槻峯遺跡出土
十三菩提式(前期末)



図版 3
長野県大田苅遺跡出土
十三菩提式(前期末)

図版 4
千葉県八千代市赤作遺跡出土
十三菩提式(前期末)

図版 5
東京都多摩市和田西遺跡出土
諸磯 b 式(前期後葉)

図版１の上川名貝塚出土の人面装飾付土器は眉や鼻を隆線で、目をくぼみで表現している。吊り上がった眉と縦位に鼻がＹ字状に交わり表現されている。眉毛、目、鼻の周囲に丹塗りがみられる。この土器について渡辺 誠は「人面装飾付土器の重要な特徴を最初から備えていることに注目される (注１)。」、また、藤沼邦彦 (弘前大学教授) は「人面装飾付土器の最古の例であり、目鼻の表現があるのは土偶よりも先行している (注２)。」と述べている。

図版２は口縁部の破片で、眉部は細い粘土紐が貼付され連続爪形文が施文されている。口縁部の縁にも同様の施文が見られる。目、口は裏面まで貫通してくり抜かれている。鼻部は粘土を貼り付け、眉や鼻はリアルな作りとなっている (注３)。

図版３については詳細について知ることは出来ていない。

図版４は報告書 (注４) に「平口縁の一部が山形にやや突出しておりその部分に人面装飾が付いている。上向きの平坦な顔面は、上下端を沈線で区切っている。上端は突起の形状に沿ってほぼ水平に、下端は突起の付け根に沿って弧状に引かれており、突起の形状と相まってやや下膨れである。顔面には穿孔による両眼と口の表現がある。両眼の目尻は若干切れ上がり、口元は左上に上がり気味である。また、黒く変色している範囲は隆起線が剥落したものと思われる。この範囲と付随する複数の沈線から、眉と鼻梁を連結した意匠が添付されていたと推察される。口縁部には顔面突起を囲むように枠状の区画文が形成されていたと思われ、顔面突起下の剥落部にはこの区画文の陵線を集約した橋状等の突起が付された可能性がある。」と記述されている。

図版５は波状口縁付近に円盤状添付がなされており、そこに棒状の施文具による刺突で目と口が、粘土貼付による鼻が表現されている (注５)。

以上、５例を紹介したが、ここで特筆すべきことは図版１以外は前期末または後葉の時期であり、図版１だけが前期初頭となっていることである。

そして、この時期より古い時期の人面装飾付土器の出土例は報告されておらず、現在、図版１の宮城県柴田町上川名貝塚出土の人面装飾付土器は日本最古で唯一の人面装飾付土器となっていることが分かる。

上川名貝塚の調査にも関わり、本貝塚の研究者である加藤 孝は人面の描き方に着目し「眉上弓の末端が上がる程古い形式とされていることを裏書きする編年学上極めて貴重な資料である (注６)。」と発見当時からその重要性について言及している。

この人面装飾付土器について渡辺 誠は氏の論文の中で「時期的にもっとも古い例は宮城県上川名貝塚例で、前期初頭の上川名Ⅱ式期に属す。前期例は他にみられず、突出している。人面装飾付土器の最古の位置を占めている。そのうえこの眉毛、鼻および目の周囲には丹塗りがみられ、人面装飾付土器の重要な特徴を最初から備えていることに注目される (注１)。」と述べている。

人面または獣面が装着されている土器研究は 100 年以上前から八幡一郎、鳥居龍蔵等により研究がなされている。人面装飾付土器の発見数は年々増加し 750 例程になっているが、それでもなお 70 数年前 (1950 年) に発見された上川名貝塚の人面装飾付土器は日本最古、日本唯一の座を譲っていないのである。

(注１) 吉本洋子・渡辺 誠　2005 『人面・土偶装飾付土器の基礎的研究』
(注２) 藤沼邦彦　1997 『縄文の土偶　歴史発掘３』 講談社
(注３) かながわ考古学財団　1997 「神奈川県泰野市下大槻峯遺跡」 『かながわ考古学財団調査報告 24』
(注４) 千葉県教育委員会　2016 「八千代市赤作遺跡」 『一般国道 296 号道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』
(注５) 青木 敬　桐生直彦　1998 「縄文時代前期の人面装飾付土器」 『東京考古 16』
(注６) 加藤 孝　1951 『宮城県上川名貝塚の研究」 『宮城学院研究論文集』

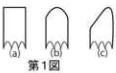
内嶋コレクションから

【上川名貝塚収集土器】

内嶋コレクション土器での上川名貝塚収集土器には口縁部、体部、底部破片とがある。殆どが大破片である。本稿では全ての口縁部45点と小型土器1点、実測可能の底部4点について検証し提示した。土器の器形、文様等については以下の様な視点から分類・記述を行った。器形は、Ⅰ類：口縁部が直線的に立ち上がるもの、Ⅱ類：口縁部が外反するもの、Ⅲ類：頸部に屈曲をもち、口縁部が内湾またはわずかに内湾ぎみに立ち上がるものとに、口縁部は形状によりA類：平坦口縁、B類：波状口縁とに分類した。口唇部には加飾が施されていないものと加飾として圧痕文等が施されているものに分類した。加飾されたものについては、その圧痕等の形状により施文器具先端の形状、太さ、施文方向、押圧によるものか刺突かなどについて観察を行った。口唇部断面形は（a）：上面が平坦なもの、（b）：丸みを帯びるもの、（c）：先端が細くなり丸みを帯びるものとに分類した。（第1図）

文様については、地文だけのもの、口縁部・頸部等に文様帯をもつものとが見られる。

文様帯については主に形状、施文器具、施文方向等について記述した。地文は斜行縄文、羽状縄文、還付端末文、斜行撚糸文とに分類した。胎土については全ての土器に繊維、石英等の混入が認められた。口縁部破片以外では、小型土器1点、底部の形状が分かる実測可能な底部破片4点について記述を行った。



第1図

（1）第Ⅰ類土器（図版1：1～9　写真図版1：1～9）

口縁部に屈曲をもたず直線的に立ち上がるものである。すべてA類：平縁である。口唇部に加飾がないもの（1~3,5,6）、棒状器具等により加飾されているもの（4,7,8）半截竹簡等の工具により施文されているもの（9）とがある。口唇部断面は（a）：平坦なもの（1,4）、（b）：丸みを帯びるもの（3,7,8,9）、（c）：先端細くなり丸みを帯びるもの（2,5,6）とがある。口縁部に文様帯もつもの（2~6,9）とないもの（1,7,8）とがある。2は5～6状の平行沈線文間に竹管工具等による連続刺突文が横位に施文されている。3，5は半截竹管状の工具等による連続刺突文が、4，6は丸みを帯びた棒状工具等による連続押圧文が、4は粗雑な平行沈線文が7～8状横位に、9は曲線状の沈線文がジグザグ状に施文されている。頸部に文様帯が見られるもの（1,3,4,9）がある。1は隆帯上に押圧文が、4は連続した押圧状の刺突文が、3，9には隆帯が見られず、3は爪形状の刺突文のみが、9は爪形状の刺突文のみが上下から交互に連続して施文されている。地文は斜行縄文のもの（4,6,7）、羽状縄文のもの（3,5,8）、結束羽状縄施文のもの（1,9）、還付端末状のもの（2）とが見られる。1は口縁径が直径約40㎝の大型の深鉢土器の破片である。

（2）第Ⅱ類土器（図版2・写真図版2：10～22　図版3・写真図版3：23～39　図版4・写真図版4：40、41）

口縁部が外反するものである。口縁はB類：波状口縁が（28,29,40）3点のみで他はすべてA類：平坦口縁である。口唇部形態は加飾がないものが60％以上であるが、棒状器具等により加飾されているもの（26,32~38,40,41）も見られる。口唇部断面は（a）：平坦なものが約30％、（b）：丸みを帯びるものが約50％、（c）：先端が細くなり丸みを帯びるものが約20％であった。口縁部に文様帯をもつもの（26,39,40）がある。26、40は棒状器具等による圧痕文が施文されている。39は竹管器具等による横位刺突文と一条の横位沈線文が施文されている。頸部に文様帯が見られるもの（27,32,35,36,40）がある。35、40は竹管器具等による刺突が上下から、36は上方だけから交互に施文されており、32は頸部のくびれ部に棒状器具等を下部から刺突し隆帯状に見えるような横一条の文様が作り出されている。27は押し引き状の刺突文が無文帯上に横位に施文されている。地文は斜行縄文が約25％、羽状縄文が約22％、結束羽状縄施文が約45％、斜行撚糸文約2％、羽状縄文＋付加縄文が1％弱だった。

（3）第Ⅲ類土器（図版4：42～45　写真図版4：42～45）

頸部に屈曲をもち、口縁部が内湾またはわずかに内湾ぎみに立ち上がるものである。すべてA類：平坦口縁である。口唇部に加飾がないもの（42~44）、棒状器具等により加飾されているもの（45）とがある。口唇部

断面は（a）：平坦なもの（44）、（b）：丸みを帯びるもの（42,43,45）とがある。口縁部に文様帯が見られるもの（44）があり、口縁部上端に比較的幅広の爪形状の文様が横位に連続して２条施文されている。頸部に文様帯をもつものはない。地文は羽状縄文（42）、斜行撚糸文（43）、結束羽状縄文（44,45）である。

小型土器（図版４：46　写真図版４：46）

46は完形の小型土器である。器形は底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。口縁径は約11.8㎝、底径は約５㎝である。口唇部断面形は（b）：丸みを帯びている。無文である。体部の一部に指の跡か指で撫でたような痕跡が見られる。表面は凹凸がありゴツゴツしている。

底部土器（図版４：47～50　写真図版４：47～50）

47～50は底部土器の破片である。47は底部が完全に残っているが、体部は高さ2.5㎝程しか残存していない。体部には撚糸文が施文され、底部にも見られる。底部は平底であるが僅かに窪んでおり、凹凸が見られる。

48は底部から口縁部にかけて僅かに湾曲しながらが外傾する。底部は３分の２が残存しており、推定底径は約4㎝である。体部は高さ3.5㎝程しか残存していないが、口縁径に対して底径比が非常に小さい深鉢土器と思われる。49は底部から口縁部にかけて外傾する。底部は３分の１程残存しており、推定底径は約4㎝である。体部は高さ2㎝程しか残存しておらず、口縁径は不明であるが、体部の傾きの角度から推定するとこの土器も口縁径に対して底径比が非常に小さい深鉢土器と思われる。体部の底部付近に押し引き状の文様が横位に数条施文されており、底部にも円形、直線状の押し引き状の文様が施文されている。50は底部から口縁部にかけて僅かに湾曲しながら外傾する。底部は４分の１程度しか残存していない。推定底径は約6.5㎝である。体部は高さ2㎝程しか残存しておらず、口縁径は不明である。体部の底部付近にはRLの押圧縄文が施文されており、底部には数条のRLの押圧縄文が渦巻き状に施文されている。

収集土器の編年的位置づけ

今回紹介した土器は収集資料であり点数も少ないため、その特質について正確を期した考察は難しいものと思われる。本稿では収集土器からどのような傾向を伺い知ることができるのかについて論じてみることにしたい。地文については圧倒的に多く見られたのが羽状縄文であった。その中でも結束された羽状縄文が比較的多く見られた。多く見られた順に並べてみると、結束羽状縄文（18点）、羽状縄文（12点）、斜行縄文（11点）、斜行撚糸文（２点）、還付末端文（１点）羽状縄文に付加縄文が見られるもの（１点）となる。撚糸文は非常に少なかった。口縁部の形状は平坦口縁と波状口縁とがあるが、平坦口縁が殆どで波状口縁のものは３点しか見られなかった。器形は外反するものが大多数（46点中32点）だった。直立するものは９点、内反するものは僅か５点だった。胴部の器形については僅かに膨らみのあるものが多く見られた。

文様については地文だけのもの（46点中18点）が半数近くあり、文様が施文されている土器は28点であった。文様は棒状または竹管状工具等を使用し、口唇部、口縁部、頸部に集中して施文されており、口縁部破片を見る限りでは胴部に施文されているものはなかった。文様は器面を横位に全周するように連続した圧痕または刺突が施文されているものが殆どであった。文様で特筆すべきは、口唇部が加飾されている土器（46点中17点）が多く見られることである。粘土等で型を取り施文具を復元すると、第２図のような棒状または半截竹管状の器具等を用いていることが推測された。

第２図

㋐先端がそろぼんを横から見たような形状や、㋑丸みを帯びたもの、㋒平らなものなどの棒状器具等や、㋓半截竹管状の器具等を垂直または斜め方向から押し付けたり、㋔太さが1㎝、または㋕0.3㎝程の棒状工具の腹部を斜めに押し付けたりして施文しているものと思われる。なお、㋖縄文原体をそのまま押し付けたものも1点見られた。口縁部文様もほぼ同じ器具等、方法で施文されているものと思われる。口縁部文様で特徴的なのは口唇部上端の一部にまで施文されているものが多く見られることである。中にはそのまま口縁部を超えて口唇部まで施文されているもの（図版1－8）も見られる。頸部においても同様の傾向が見られる。頸部文様をもつものは11点ある。隆帯が巡らされているものとないものとが見られる。いずれも棒状または竹管状器具等を垂直、斜め方向から押し付けたりしている。上下から、上方、下方だけから、地文上、無文帯上に刺突文が見られる。以下の第3図は頸部文様帯を模式的に表したものである。

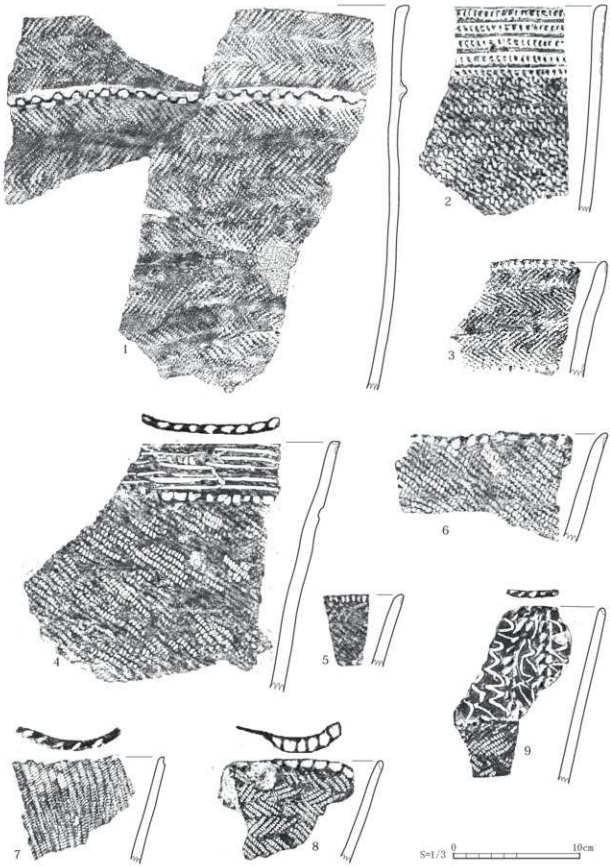
第3図

頸部文様で主体となっているのは刺突である。隆帯貼付のものだけでなく、隆帯の貼付がなくても、器具を差し込み、押し付け、めくり上げたりすることによって一見隆帯状に見える区画帯を作り出そうとする意匠が見られるものもある。底部については底径が6.5㎝程のものも見られたが、底径が4㎝程の比較的小さいものが多く見られる。底面には渦巻き状の押圧縄文、押し引き状の刺突などが施されていること、底径が口径に比較してかなり小さいという特徴的な傾向が見られる。器厚は薄いもので0.6㎝、厚いものでは1.2㎝のものが見られるが、多くは0.6～1㎝である。全ての土器に植物性繊維を含んでいる。胎土中に多少の違いはあるが石英粒等を混入しているものが殆どであった。小型土器については明確ではないが、以上の様な特質をもつ土器は、加藤 孝により上川名Ⅱ式として位置づけられている（加藤 孝　1951）。また、角田市「土浮貝塚」の報告書でも同様の特質を有する土器を上川名Ⅱ式と位置づけている。これらのことにより、本収集土器の多くは編年的に上川名Ⅱ式に位置づけられるものと思われる。なお、上川名貝塚のコレクションは土器のみで、石器、骨角器等の収集品は見られなかった。

引用・参考文献

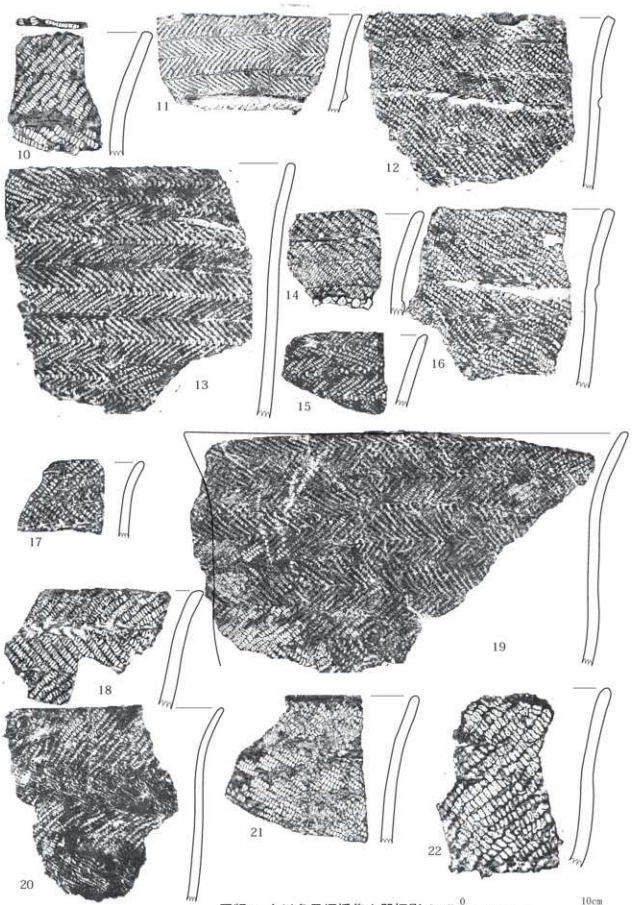
青木 敬　桐生 直彦　1998　「縄文時代前期の人面装飾付土器」『東京考古 16』
角田市教育委員会　1994　「土浮貝塚」『平成5年度調査概報』
加藤 孝　1951　「宮城県上川名貝塚の研究　―東北地方縄文式文化の編年学的研究―」『宮城学院研究論文集1別刷』
柴田郡教育委員会　1925　『柴田郡誌』
柴田町町史編さん委員会編　1989　『柴田町史通史編Ⅰ』
坪井正五郎　1908　「陸前名取郡地方における見聞」『東京人類学会雑誌』第2巻第267号6月20日
吉本洋子・渡辺 誠　2005　『人面・土偶装飾付土器の基礎的研究』（上川名貝塚出土人面装飾付土器の写真掲載されている）
かながわ考古学財団　1997　「神奈川県秦野市下大槻遺跡」『かながわ考古学財団調査報告書24』

第Ⅰ類土器



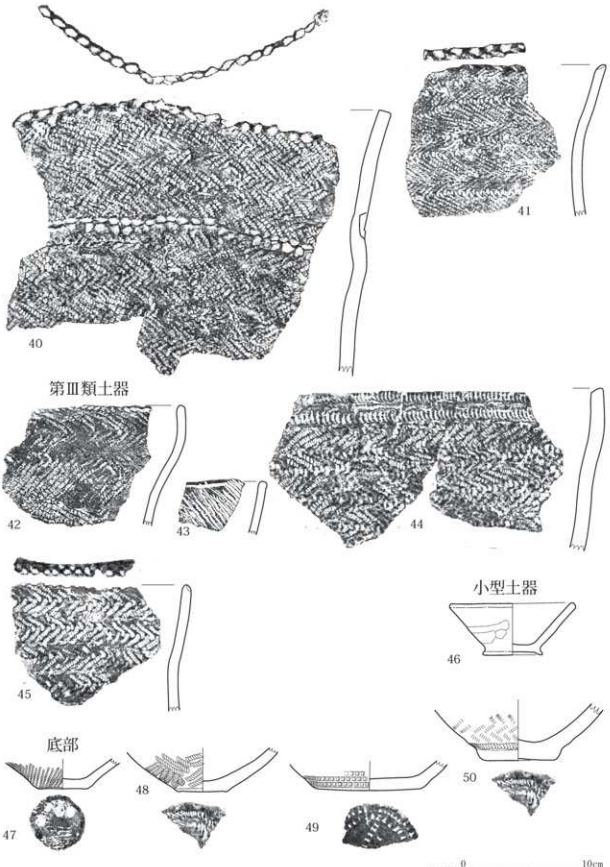
図版1　上川名貝塚採集土器拓影

第Ⅱ類土器



図版2　上川名貝塚採集土器拓影 S=1/3

図版3　上川名貝塚採集土器拓影



図版4　上川名貝塚採集土器拓影及び実測図

内嶋コレクション上川名貝塚収集土器属性表

No	器形	（）は口唇部断面形状　加飾の有無	口縁部・頸部文様帯	地　文 （）は片方原体幅	胎土	器厚
1	Ⅰ－A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし　頸部に粘土紐貼付上下方から刺突	結束羽状縄文（21㎜）	小石等を殆ど含まない	8㎜
2	Ⅰ－A	(c) 加飾なし	口縁部に5-6条の平行沈線文＋沈線間に竹管による連続刺突文	環付端末文	小石等を僅かに含む	9㎜
3	Ⅰ－A	(b)　加飾なし	口縁部上端に平截竹管等による刺突文頸部縄文上に刺突	羽状縄文　（17㎜）	小石等を殆ど含まない	11㎜
4	Ⅰ－A	(a) 棒状器具等による圧痕文	口縁部に圧痕文＋粗雑な平行沈線文が7～8条横位に施文　頸部に下方からのみの押圧状の刺突	LR 斜行縄文	小石等を殆ど含まない	10㎜
5	Ⅰ－A	(c) 加飾なし	口縁部上端に刺突文が横位に一列施文	羽状縄文　（15㎜）	小石等をやや多めに含む	9㎜
6	Ⅰ－A	(c) 加飾なし	口縁部上端に圧痕文が横位に一列施文	LR 斜行縄文	小石等を殆ど含まない	12㎜
7	Ⅰ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	口縁部文様帯なし	LR 斜行縄文	小石等を含む	8㎜
8	Ⅰ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（16㎜）	小石等を含む	9㎜
9	Ⅰ－A	(b) 平截竹管等による刺突状	口縁部に曲線状の沈線文頸部に上下方から「ハ」字状刺突	結束羽状縄文（23㎜）	小石等を殆ど含まない	9㎜
10	Ⅰ－A	(b) 縄文原体圧痕	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（40㎜）	小石等を殆ど含まない	11㎜
11	Ⅱ－A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし 頸部に線状の刺突	羽状縄文　（15㎜）	小石等を含む	8㎜
12	Ⅱ－A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし　頸部に地文上から横位の刺突	LR 斜行縄文 （21-31㎜）	大き目の小石等を含む	10㎜
13	Ⅱ－A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（20㎜）	小石等を含む	10㎜
14	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	頸部に下方からのみの刺突	LR 斜行状縄文（20㎜）	大粒の小石等を含む	8㎜
15	Ⅱ－A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（20㎜）	小石等を含む	9㎜
16	Ⅱ－A	(a) 加飾なし	頸部に幅広の窪みが横位に見られる	LR 斜行縄文　（20㎜）	大き目の小石等を含む	10㎜
17	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（22㎜）	小石等を多く含む	8㎜
18	Ⅱ－A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（32㎜）	大粒の小石等を含む	10㎜
19	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（25㎜）	小石等を含む	9㎜
20	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状＋付加縄文 （33㎜）	小石等を含む	7㎜
21	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（24㎜）	小石等を僅かに含む	9㎜
22	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	RL 斜行縄文	小石等を僅かに含む	10㎜
23	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	斜行撚糸文	小石等を僅かに含む	7㎜
24	Ⅱ－A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（12㎜）	小石等をあまり含まない	9㎜
25	Ⅱ－A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（20㎜）	小石等を多く含む	9㎜
26	Ⅱ－A	(c) 棒状器具等による圧痕文	口縁部上端に棒状工具等による圧痕文が横位に一条施文	結束羽状縄文（23㎜）	小石等を僅かに含む	10㎜
27	Ⅱ－A	(c) 加飾なし	頸部の無文帯上に押し引き状の刺突	羽状縄文　（20㎜）	小石等をやや多く含む	10㎜
28	Ⅱ－B	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	RL 斜行縄文	小石等を含む	10㎜
29	Ⅱ－B	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文	小石等を僅かに含む	10㎜
30	Ⅱ－A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（14㎜）	小石等をあまり多く含まない	12㎜
31	Ⅱ－A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	LR 斜行縄文　（34㎜）	小石等を含む	9㎜
32	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	頸部が段差状に大きくくびれる下方のみから刺突	RL 斜行縄文	小石等を比較的大く含む	8㎜
33	Ⅱ－A	(a) 棒状器具等による圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（20㎜）	小石等を含む	8㎜
34	Ⅱ－A	(a) 棒状器具等による圧痕文	文様帯なし口縁部	LR 斜行状縄文	小石等をあまり含まない	10㎜
35	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	頸部の上下方から刺突　ジグザク状	結束羽状縄文（15㎜）	小石等を多く含む	10㎜

No	器形	（）は口唇部断面形状　加飾の有無	口縁部・頸部文様帯	地　文 （）は片方原体幅	胎土	器厚
36	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	頸部上方からのみの刺突	結束羽状縄文（18㎜）	小石等を僅かに含む	10㎜
37	Ⅱ－A	(a) 棒状器具等による圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（13㎜）	大粒の石等を僅かに含む	10㎜
38	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（19㎜）	大粒の石等を比較的大く含む	8㎜
39	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	横位沈線文による幅の狭い文様帯が施文	結束羽状縄文（27㎜）	小石等を殆ど含まない	9㎜
40	Ⅱ－B	(a) 棒状器具等による圧痕文	口縁部上端の一部に棒状器具等による圧痕文　頸部に上下方から圧痕状の刺突	結束羽状縄文（14㎜）	小石等を含む	11㎜
41	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（18㎜）	小石等を含む	8㎜
42	Ⅲ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文　（20㎜）	小石等を含む	7㎜
43	Ⅲ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	斜行撚糸文	小石等を殆ど含まない	7㎜
44	Ⅲ－A	(a) 加飾なし	口縁部に幅広の爪形状の文様が横位に二条連続施文	結束羽状縄文（20㎜）	小石等を含む	11㎜
45	Ⅲ－A	(b) 棒状器具等による圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文（22㎜）	小石等を含む	9㎜
46	Ⅰ－A	(b) 加飾なし	文様帯なし　ユビナデのような痕跡が見られる	無文	小石等をわずかに含む	6㎜

No	底　径	底部厚	文様・特徴等	地　文	残存部器厚
47	41㎜	8㎜	残存高が約２５㎜の底部破片。体部には撚糸文が施文されており、底面まで施文されている。底部には凹凸が見られるがほぼ円形の平底である。	撚糸文	7㎜
48	（40㎜）	9㎜	底部から口縁部にかけて僅かに湾曲しながら外傾する。残存器高約35㎜の底部破片。	方向をかえたRLの斜行縄文	10㎜
49	40㎜	8㎜	底部から口縁部にかけて外傾する。残存器高約20㎜の底部破片。体部には底部付近まで押し引き状の文様が横位に数条施文。底部にも円形、直線状の押し引き状の文様が施文。	不明	9㎜
50	（65㎜）	10㎜	底部から口縁部にかけて外傾する。残存器高約20㎜の底部破片。底部付近にRLの押圧縄文が施文。底部には数条のRLの押圧縄文が渦巻き状に施文。	羽状縄文	11㎜

【口縁部形態】　Ⅰ類：口縁部が直線的に立ち上がるもの
Ⅱ類：口縁部が外反するもの
Ⅲ類：頸部に屈曲をもち、口縁部が内湾またはわずかに内湾ぎみに立ち上がるもの

【器形】　A類：平坦口縁　　B類：波状口縁

【口唇部断面形】(a)　平坦　(b)　丸みを帯びるもの　(c)　先端が細くなり丸みを帯びるもの

写真図版

第Ⅰ類土器

縮尺＝1／3

写真図版1

第Ⅱ類土器

縮尺＝1／3

写真図版2

写真図版3　縮尺＝1／3

第Ⅲ類土器

小型土器

底部

縮尺＝1／3

写真図版4

柴田町文化財調査報告書第８集

柴田町の遺跡

- 平成 31 ～令和３年度　発掘調査報告書 -

令和５年３月 18 日印刷
令和５年３月 23 日発行

発行　柴田町教育委員会
宮城県柴田郡柴田町船岡中央２丁目３-45
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町 24-24